

言語の意味形成における感覚モダリティの役割

The Role of Sensory Modalities in the Forming of Linguistic Meaning

川村 義治
Yoshiharu Kawamura

〈要旨〉

言語の意味とは何かという問いから、人間の諸感覚がいかに意味形成に関わっているかに注目して、いくつかの学問的見解を跡付けた。これまで言語学は意味を様々に定義づけてきた。その中でも言語を記号として位置づけて音声と概念および概念間の恣意性を解明したソシュールの影響は圧倒的であった。一方、パースはアイコン性や指標性も記号の性質に含まれるとした。言語の恣意性をめぐって、色彩用語の出現順や焦点色の発見から語の概念における人間の感覚の関与が指摘された。発達心理学は幼児の概念形成（カテゴリー化）における身体活動の役割を検証した。認知意味論は身体的経験に基づく人間のゲシュタルト生成能力を問題にした。神経心理学は脳の活動から感覚モダリティが意味形成に関与することを説いた。いずれも、言語が人間の身体的認知的能力の産物である以上、感覚経験や運動経験が意味形成になんらかのあり方で関わっていることを示唆している。

〈キーワード〉

意味, 感覚モダリティ, 一般認知能力

1 意味論

1-1 意味論

言語の中で最も基本的な単位は「語」である。語は物質的な形式（音声あるいは文字）と概念的な内容（語義）から成立する。ある言語の音声を扱う学問分野は音韻論であり、意味を扱うのが意味論である。一方文法は、語の構成素（例：player= play+er）から語自体の問題、語の結合である「句」や「文」の構造までを取り扱う。それぞれの研究部門は、形態論、語彙論、統語論と呼ばれる。以上が言語研究部門に関する一般的な分類である。このうち、意味論は1-2で述べるような様々な観点から言語の意味を定義づけてきた。そのような意味論は、言語をひとつの独立した体系として捉える形式意味論であった。一方1980年代に確立した認知意味論は、意味は人間の身体的経験と関わり、人間のゲシュタルト的認知能力から生成される概念であると考えられる。疎論は、認知意味論的見解に基づいて、意味生成における人間の感覚様態（モダリティ）の関与を諸学の成果をもとに考察する。

1-2 池上（1975）の意味規定

意味とは何かという従来の意味の諸定義に関して、池上（1975, 70-72）は大きく三つの対立軸を指摘した。第一に「心理主義」と「物質主義」の対立、第二に「具体例」と「総計」・「共通性」という対立、第三に「意味そのもの」を考察しようとする立場と「意味に接近するもの」の規定を試みる立場の対立である。

「心理主義」的見解は、意味＝イメージ説と意味＝概念説がその典型で、意味を人間の心理的存在とみなす。池上（p 19）はイメージ論の問題点として、イメージは「ふつつ特定のもののイメージであり、しかもそれは人によってかなり変わりうる」ので「ある特徴を共有する一連のものに対して適応されるという事実と矛盾する」として、意味＝イメージ論を退けた。さらに mother のイメージを例にあげて、そのイメージの典型性は「決めようもない」（p 40）と述べて、典型的イメージの存在を否定した。ただし、それらの意見は、おそらく Rosch (1975) のカテゴリー論が発表されていない段階での見解であろう。認知意味論のバイブル的存在である Lakoff (1987) の見事な翻訳本である池上 (1993) では、指示物の典型性に基づく典型的なイメージ（プロトタイプイメージ）の存在が認められている。

Rosch は哲学者のウィトゲンシュタインが提唱した「家族的類似性」という概念を用いて意味の典型性を説明し、「家族的類似性」はカテゴリー化の原理であると主張した。Rosch のアプローチを引き継いだ Lakoff は、mother の概念分析を例に、ひとつのカテゴリーにはいくつかの認知モデルがあり、そのモデルの重複から mother の概念が形成されていることを論述した (pp. 74-77)。

意味＝概念説に関して、池上 (1975, 41-42) は、Sapir(1921, p13) の“...the speech element ‘house’ is the symbol, first and foremost, not a single perception, nor even of the notion of a particular object, but of a ‘concept’, in other words, of a convenient capsule of thought that embraces thousands of distinct experiences...”を引いて、「概念」は、個別的であるイメージとは異なって、異なる経験を包含する一般性を持つとした。そのうえで、意味をただ「概念」であると定義することは単に言い換えにすぎない危険性があるとして、意味＝概念説の問題点を指摘した。

一方「心理主義」と対立する「物質主義」とは、意味の本質を外部世界における測定可能な物理的な要素に求める考え方で、具体的には指示物(reference)や身体的反応(response)、発話の場面(situation)等に求める。ことばの意味は指示物にあるとするならば、「家」の意味とは現実の構造物となる。指示物はことばが指す内容を明快に提示できる。池上は、「明けの明星」と「宵の明星」は、金星という同一物を指示することがことばの意味は異なる点を指摘して、意味＝指示物説を排除した。明けの明星は東の空に見えるが、宵の明星は日没後の西の空に輝く。また、意味＝指示物説では具体的な指示物を持たない抽象語や機能語に対応できないとした。

条件反射的な身体的反応を意味とする考えは、行動主義の立場からの意味論である。例えば、タオルの意味とは布切れで体や物を拭くという行為になる。「行動主義」とか「刺激に対する反応」という表現を聞くだけで機械的で単純な見解であるという「反応」が返ってくるほど意味＝反応説は旗色が悪い。池上は「ある語に対する反応の内容は必ずしもわれわれがその語の意味と諒解している内容とは一致しない」(p49)とした。確かにある語に対する反応は人により様々であり、その語の意味として統一的な反応を規定することはできないであろう。ことばの意味に身体的な反応を当てる単純さを承知のうえで、あえて意味＝身体的反応説の長所を述べるならば、身体的経験に注目を向けさせる点にある。広辞苑(5版)は「タオル」を「布面に輪奈を出した織物。浴布。タオル地」と解説し、ロングマンの現代アメリカ英語辞典は“a piece of cloth that you use for drying your skin or for drying things

such as dishes”と記述する。ちなみに、Concise Dictionary of English Etymologyによれば、towelの語源は中世フランス語や古英語、古代高地ドイツ語にさかのぼり、washを意味する語に基づいている。そうすると、「布切れで体や物を拭く」という日常の動作をタオルの意味に当てることはまったく的外れであるとは言い切れない。タオル地の持つ柔らかな触感や拭く動作は、タオルとは何かという判断を下す際の重要な根拠になると言えるだろう。池上は、意味＝反応説から「ある表現の意味をそれに対する反応というように限定しないで、それをひき起こす刺激、ないしは、それが使われる場面を意味するという考え方」(p 49)を新たに提案した。意味＝場面説である。これは、祖論の立場に立てば、ことばと関わる身体的経験に注目する視点である。

第二の対立である「具体例」とは個々の具体的な事物やイメージを意味とする立場であり、「共通性」は個々の事物やイメージから抽出される共通の属性を意味とする立場である。池上は、「具体例をもって意味とする考え方をとると、ある語の意味は無限にあるという矛盾に陥ってしまう」(p 71)と述べる。また、「共通性」に関しては、見出すことが困難な場合が多いうえに、それは語の意味とは必ずしも一致しないとされた。この二つの対立は先に述べたカテゴリーにおけるプロトタイプの存在により解消されることになる。

第三の対立である、「意味そのもの」と思われるものへの接近を試みる立場と「意味に接近するもの」の規定を試みる立場に違いとは、次のようなものである。池上の説明によれば(p 71)、意味を「イメージ」「概念」あるいは「もの」として捉える方向は意味そのものの正体を追及する立場であるのに対して、「反応」や「場面」として捉える方向は意味に付随している現象から意味へ接近する立場である。

池上が指摘した意味の規定をめぐる三つの対立は、認知的な言語観から捉え直すと、大きく二つの立場に分けることができる。従来からある形式意味論の立場と認知意味論の立場である。形式意味論とは、言語はひとつの自立的な体系であるので、言語自体を厳密に分類や分析することで意味が規定できるという立場である。一方認知意味論は、言語主体である人間の外界(自然環境と社会環境)での身体的経験や認知活動を通じて意味を規定する立場である。したがって、言語自体の意味と一般的な知識との明確な区別は存在しなくなる。

2 記号としての言語

2-1 ソシュールの記号学

言語の「本質」を記号という観点から考察したのはソシュールである。ソシュール研究の第一人者であった丸山圭三郎氏は、著書で「言語はなりよりもまず記号の体系であること」(1983, p 117), 「言語学はより大きな記号学という学問に包摂」(p 118) されると同時に「言語は記号学の原理モデルであり, 記号の本質は言語によってしか見出せない」(p 118) というソシュールの言葉を紹介した。

ソシュールは記号としての言語の特徴を言語の恣意性という原理に置いている。言語の恣意性は大きく二つに分けられる。第一の恣意性は語の形式と内容に関するものである。シーニュ(記号)である語は, シニフィアン(意味するもの)とシニフィエ(意味されるもの)あるいは聴覚映像と概念から構成されるが, 「言語において, シニフィアンをシニフィエに結びつける絆は根底的に恣意的である」(p 197) と, 丸山はソシュールの思想を説明した。第二の恣意性はラングと呼ばれる言語体系内の差別的関係である。新たな意味とは他の語の意味との差異であると考えられる。この二つの恣意性に関して, 丸山は「第一の恣意性は, 第二の恣意性のコララリー」, つまり当然の帰結(corollary)にすぎないとした。記号間の示差的関係性を記号体系の根本原理とするのである。したがって, 「言語記号の本質は, 非実体としての関係のみに基づく非自然的価値である」(p 205)。換言すれば, 外界を意味ある世界に分節する基盤は, 「言語外現実のなかではなく, 言語体系自体のうちにある, まことに非自然的な尺度」(p 200) という結論に至る。

2-2 ソシュール批判

言語という網の目による世界の分節というテーマでよく話題にされるのが, ヘレン・ケラーの有名な「水」の発見である。丸山(p 48)は, 「water という語は手のひらに書かれた触覚イメージですが, このイメージがそれまで存在しなかった意味を担い, 現実が分節され, 彼女の意識も同時に分節されました。それまで感覚=運動的に知覚していた水が, 突然別の網の目に区切られて, 記号の指向対象としての水となりました」と述べている。water という言葉を学習することで, ヘレン・ケラーはそれまで手をすり抜けていく冷たくて流れているモノを初めてひとつのカテゴリーとして捉え返すことができたのである。しかし, 水という物質は, それ以前においても彼女の日常生活の体験での触感や運動感覚を通じて空気や金属とも異なるく冷たくて流れるモノ>として感じられていたはずであり, 決して「非自然的」な否定的関係性(差異)からのみ water

の意味するものを了解したわけではないだろう。ヘレン・ケラーの自伝によれば, アイスcreamがほしくなると彼女はアイスcream機のそばに行き, 体を震わせる動作をして冷たさを表したという。こうした点から, ニヶ崎(1990, pp. 51-52)は, ヘレン・ケラーには言語学習以前にすでに外界に関して知識がいくらかあり, 身振りである程度意思疎通をはかることができた指摘して, 「名前を学ぶことによって外界の分節を学ぶというよりも, あらかじめ知っている事物を指して(触れて)その名前を聞くという形をとった」と解釈した。

虹の色の区別は言語によって変わるという事実は, まさに言語の恣意性を如実に示す証拠としてさかんに取り上げられてきた。例えば, 日本語では七色である虹が三色や四色でしか区別されていない言語が存在する事実から, 「言語はまさに, それが話されている社会にのみ共通な, 経験の固有な概念化・構造化であって, 各言語は一つの世界像であり, それを通じて連続の現実を非連続化するプリズムであり, 独特のゲシュタルトなのである」と主張する丸山(1981, p 119)の言葉は, 美しく理路整然としている。だがそれ以前に, Berlin & Kay(1969)の基本色彩用語の発見によって, 世界中の言語において11の基本色彩用語には出現順(白・黒<赤<緑・黄<青<茶<紫・桃・橙・灰)があること, 基本色には焦点色(例えば青ならばどの文化に属する人にも共通する最も青らしい青として認知される基準的な青色)が存在することが明らかになった。この事実は, 色彩のカテゴリーが人間の生理的条件により一部身体化されていることを示している。Rosch(1973)は, たとえに二つの色彩カテゴリーしか持たない民族でも基本色彩の焦点色がそれぞれのカテゴリーの典型的な色彩として捉えられており, 基本色彩の焦点色の名称は非焦点色の名称より容易に学習されることを観察した。したがって, 世界は混沌たるカオスの如き連続体であり, 言語によって初めて意味を担う単位に分節されるというソシュールの言語観は, 覆されたことになる。

2-3 パースの記号論

パースの記号論は壮大かつ難解なもので, 著作の邦訳や解説書も少ない。ここでは, 有馬(2001)を参考にして, 感覚様態と言語形式の有契的な関係を探ることができれば十分である。

パースの記号論では, 記号の意味作用は記号と対象と解釈項という三項により考察され, 『「解釈」によって世界を知る』(有馬, p 12)ことがパースの思想の中心である。個々の記号は対象との関係において三つに分類される。記号と対象との感覚的な類似性によって関係づけられる「類像」(アイコン), 指示関係によって関係づけられる「指標」

(インデックス), そして言語によって関係づける「象徴」(シンボル)である。「象徴」はソシュールの「記号」に相当するが, ソシュールの記号が恣意的な関係のみにより成立しているのに対して, パースの象徴記号(典型的には言語)は恣意性に加えて「根底にアイコン性とインデックス性をも多様な程度において常に含んでいる」(有馬, p 107) 点がしなやかでかつしたたかである。

犯罪現場に残された足跡は犯人の身体の一部を写す点でアイコン的であるが, 犯人を特定する手がかりとしてインデックス性を持つ記号である。同じように, 写真は対象のイメージを写している点でアイコン性を持つが, その類似性は対象と対面する状況で撮られている点ではインデックス性をもつ。では言語はどのような記号として考えられるのであろうか。「ザーザー」のような実際の音をまねて言葉としたオノマトペ(擬音語)は, 対象の質の聴覚的な類似であるのでアイコン的の性質を持つ。音が発生する状況を喚起する点ではインデックス性を持つ(「ザーザー」は大量の水や雨が降り注いだり大量の砂や穀物が移動したりする状況を描写する)。「スプーン」のような普通名詞はどうであろうか。その音声は対象物とは無関係である(元々は木の片という意味で, 語義的には split とも関係するので, 語源をさかのぼると音声はなんらかのアイコン性を帯びているかもしれない)。したがって, 音声と概念が恣意的に結びついた典型的な言語記号であると言えるが, 言語獲得のプロセスを視野に入れると話はまったく別である。幼児は実際にスプーンを使う場面で「スプーン」が何を意味するかをじょじょに理解していく。同時に食事という経験を通じて, 「スプーン」という音声はスプーンのアイコン性とスプーンに対するインデックス性を帯びることになる。抽象的な概念を持つ言葉であっても同じで, 使用経験のなかでアイコン性とインデックス性を帯びていく。したがって, 言語の発生プロセスという興味深い問題は傍らに置くとしても, 慣習的な存在である言葉は, 個人の言語獲得という局面ではアイコン的かつインデックス的の性質を現象的に持つ記号なのである。ただし, それらが言語の意味と呼べるかどうかは以下で検討することになる。

3 認知の身体的基盤

3-1 言語獲得

「ボール」の語義は, 広辞苑では素材と形に注目して「ゴムまたは革などで作ったまり。球」と記述されている。一方, ボールって何?と問われると, たいていの人は投げたり転がしたりした経験に言及するだろう。ボールは, 握ったときの感触や投げたり打ったりしたときの体感に基づいてその素材や形が理解されている。

ネルソン(1977)は幼児が身体的経験に基づいてボールをカテゴリー化する様子を実験で明らかにした。被験者は生後12ヶ月から20ヶ月の幼児18名である。最初のテストは, 10点のモノの中からボールを選ぶ実験である。それらのモノは, I: 形はボールに似ていないが機能が似ているモノ3点(a ソフトなプラスチック製の楕円形のブロック b 小さくて柔らかいフットボール c 大きくて硬いプラスチック製のフットボール), II: 形は似ているが機能が似ていないモノ3点(a 硬いプラスチック製の重くて黒いボール b 台に取り付けられている回るコルク製のボール c 台の上を回る丸いガラガラ), III: 形も機能も似ていないモノ3点(a 小さなフリスビー b フリスビーに似た四角いブロック c 円筒形のガラガラ), IV: 幼児用の本物のボール1点である。各被験者に「ボールを渡してください」と問いかけてボールを選ばせる行為を5回繰り返した。その後10分間, 被験者はそれらのモノを自由に掴んで投げたり転がしたりして遊んだ。そしてもう一度同じテストが行われた。最初のテストでは, IV の実際のボールを選んだ回数に次いでI群(形はボールに似ていないが機能が似ているモノ)を選んだ平均とII群(形は似ているが機能が似ていないモノ)の平均がほぼ同じであった。遊んだ後の二番目のテストでも, IV の本物のボールが最も多く選ばれたが, I群の選択が大きく伸びたのに対してII群の選択が大きく下げた。また, III群の選択も落ちた。これらの結果は, 身体的経験がボールのカテゴリー化に影響を与えることを示唆した。また, 被験者18名中10名の幼児が「ボール」という語を理解しており, 最初のテストではそれらの10名が形で選ぶという相関関係が見られたが, 二番目のテストではどのような相関も見られなかったという。

ネルソンは, 上記のほか二つの異なる実験の結果から, 幼児は名づける前にモノをカテゴリー化できるかという問いに対して「できる」という結論に達した。そして, カテゴリー化の原理は知覚的なものよりも機能的なものであるとした。幼児はたとえ「ボール」という言葉を知らなくても, 実際にモノを投げたり転がしたりして, モノをく弾んだり転がったりするモノ>とく弾んだり転がったりしないモノ>という二つのカテゴリーに分けるからである。この結論は, 丸山(1983, pp. 46-47)が取り上げた幼児の言語獲得に関するエピソードと対比すると興味深い。丸山は電車の中で「ママ, デンシャって人間なの?それともお人形なの?」と尋ねた幼児の発言を紹介して, 「コトバ以前に, もちろん感覚=運動的な知能による分節行為はあります。しかし, 言語習得によって身につけるものは, そういう自然の分節行為ではなくて, まことに非自然な分節行為です」と述べて, 「繰り返し繰り返し命名を通して, 知覚

と感覚は刻一刻と密になる認識の網目によって再編成を強いられる。事物（世界）と意識（人間）というものが相互に差異化されていくのです」と解説している。丸山の見解では、感覚や知覚の段階ではカテゴリー化＝認識の網目は行えず、言語の獲得を通じて初めて世界の分節と概念の獲得が可能になるのである。

ネルソンは幼児自身の身体活動がカテゴリー化に重要な役割をはたすことを示唆したが、小林（1997）は周囲の大人の身体動作が幼児の言葉理解に作用することを実験で示した。例えば、ガラス製の卵形のモノを「ムタ」と命名して、第一グループには「転がす」という形状に合う動作を行って見せた。第二グループには「透かして見る」という性質に合う動作を行って見せた。第三グループにはただモノを見せて「ムタ」と教えた。テストでは発砲スチロール製の卵形のモノとガラス製のピラミッド形のモノを提示して、どちらが「ムタ」かと尋ねた。第一グループは発砲スチロール製の卵形のモノを選ぶ幼児が多く、第二グループはガラス製のピラミッド形のモノを選ぶ幼児が多かった。つまり、先行刺激物の形状にしる性質にしる、先行した動作に合う属性を持つモノを「ムタ」として選択する傾向がうかがえたのである。なお、動作を見せないと、二つのモノの選択は五分五分であった。正高（2001）は、小林の実験を実際の動作ではなく「ころがす」ジェスチャーや「透かして見る」ジェスチャーで行って幼児の反応を検証した。その結果、ジェスチャーでも幼児のカテゴリー化に影響を与えることが判明した。正高（p 136）は、「ことばを発する周囲の人物が意識・無意識に行う身のこなしを目にしたとき、それを自分の体と心で『なぞる』ことで、イメージ的側面を共有することを媒介にして、脱文脈化した語彙の意味の把握は初めて進行するのだと考えられる」と推測した。この発言は、サルスの脳で発見されたミラーニューロンの位置が人間の運動性言語野であるブローカ野の位置に対応するという見解を下敷きにしていると思われる。実際に動作を行うにせよ、脳内で無意識に「まねる」にせよ、これらの実験は動作情報が幼児の概念形成に関与していることを明らかにした。

3-2 認知言語論

ソシュールの言語学では、言語による分節以前の世界＝認識は混沌とした状態として捉えられる。丸山（1983, p 39）は「心理的にいうと、われわれの思想は、語によるその表現を無視するときは、無定形の不分別なかたまりにすぎない。記号の助けがなくては、われわれは二つの観念を明瞭に、いつもおなじに区別できそうもないことは、哲学者も言語学者もつねに一致して認めてきた。思想は、それだけ取ってみると、星雲のようなものであって、そのな

かでは必然的に区切られているものは一つもない。予定観念などというものはなく、言語が現れないうちは、なに一つ文明なものはない」（小林訳）というソシュールの発言を引用して、意味分化以前の意識を説明した。

一方認知的な言語論の立場では、言語の意味は外界での人間の身体的経験に基づく認知作用により生成されると考える。言語を獲得する以前の人間は決してタブララサ（白紙状態）ではなく、外界を「図」と「地」に意味分化しく身分け構造>化するゲシュタルト化能力を持っていると考えるのである。この点、丸山（1983, p 250）も同意見であるが、<身分け>と言語獲得による<言分け>の不連続性のみを主張して、連続性（例えば前述した色彩用語における「焦点色」の役割）を切り捨ててしまった。

ここでは認知的な言語観の一つの成果である「イメージスキーマ」を取り上げて、認知的取り組みの一端を紹介する。イメージスキーマとは人間が外界での身体を介しての経験から抽出する認知的図式で、人間の思考や経験を構造化する働きを持つ。例えば、「立候補する」「容疑者が浮かぶ」「名を上げる」のように、日本語には「上」方向で<知覚の出現>を意味する表現がある。英語にも“I came up with a good idea”（いい考えが浮かんだ）“He emerged as a central person in the committee”（彼は委員会のなかで中心的な人物として注目されるようになった）“A human-seeming specter rose behind the tree”（人の姿をした幽霊が木の陰から現れた）といった表現がある。反対に、「大統領候補から降りる」「夜の闇に沈む」「sink in the darkness」（闇に沈む）“memory decline”（記憶低下）という表現もある。アメリカ手話のサイン APPEAR（現れる）は上方向、DISAPPEAR（消える）は下方向に手を移動させて示す。これはいずれも地上での人間の身体的経験から抽出した「上下」という認知の図式を用いて<知覚>のあり方を捉えた表現である。したがって、語の「概念内容だけでなく、それらが主体によってどのように捉えられているか、すなわち、どういうイメージ、感情、身体感覚で捉えられているか」（辻, 2001, p 136）という観点から言語の意味を検討する必要がある。なぜなら、上記の例のように、感覚やイメージも概念に含まれるからである。

4 認知の身体的基盤

外界の刺激は、目や耳といった身体の各感覚器で受容された後、大脳皮質にあるそれぞれの感覚中枢や連合野を経て、視覚情報、聴覚情報などとして認知される。個別の感覚情報は一般に「感覚モダリティ」（sensory modalities）と呼ばれる。神経科学はこのような感覚モダリティと言語

情報との関係をどのように捉えているのだろうか。

人間の記憶は言語やイメージにより意識化されるもの（陳述記憶）と自転車の乗り方のような行動化されるもの（手続き記憶）に分かれる。山鳥（2002）は前者を表象記憶と呼び、さらに事的な事象記憶と物的な意味記憶に分ける。意味記憶は一般に言語記憶と考えられているが、山鳥は言語記憶と言語化できない個人的な意味の記憶の二つに分ける。そのうえで、山鳥は意味記憶の二つの特徴を指摘する。一つは、「意味は異なった様式情報の重ね合わせによって成立する現象」（p 83）である。犬の概念は、「犬」という聴覚表象はもちろん、視覚（犬の形）、触覚（毛と体温）、聴覚（鳴き声）、臭覚（独特の臭い）等の多様な感覚モダリティの情報が加わった様式横断的（クロスモーダル）な表象であるとする（山鳥、1998、p 34）。もう一つの特徴は、「意味記憶は類似表象の重ね合わせから抜き出された抽象イメージであって、決して知覚イメージそのものではない」（山鳥、2002、p 84）ということである。したがって、語の意味システムは感覚モダリティを横断する複合表象である非言語性意味システムと言語表象である言語性意味システムの二種類からなると、山鳥は想定する。非言語性意味システムの感覚横断性に関して、例えば視覚失念の患者は視覚対象の形態の意味を喚起できないが、他の知覚表象（聴覚など）が喚起できればたちまち対象の意味を喚起できるという。逆に聴覚失念では、聴覚的にとらえた対象は意味を喚起しないが、同じ対象が視覚的にとらえることができればただちにそれが何であるかを理解するという（p 87）。

このような事実は、非言語的な情報が特定の感覚だけに依存しない情報であり、多様な感覚モダリティ情報が非言語情報として意味に関与していることを示唆する。「ボール」を再び取り上げるならば、その概念には投げたり転がしたりした運動経験から抽出した感覚イメージや視覚イメージが含まれるわけだ。したがって動作とそのイメージ

は、「ボール」という語の理解はもちろん、記憶再生の手がかりにもなるはず。川村（2006）は語の概念に関わるジェスチャーを用いて文の記憶再生効果を検証した。

5 まとめ

ソシユールは、語は意味するもの（音声）が意味されるもの（概念）を指す記号的存在であること、ある語は他の語と差異を持つ限りにおいて存在価値があることを看破した。それゆえ、示差的価値を持つ項目（語）がどのように設けられるか、その項目がどのように名づけられるかは恣意的であると主張した。言語は人間が人工的に作り上げたものとして非自然性を持つ存在である。ただし、人間の身体的知的能力に基づいて言語が創造され運用される以上、人間が持つ様々な特性を反映する「自然性」も持つと考えるのがごく自然ではないだろうか。また、人間はある自然的社会的環境内に存在する以上、言語は使用者が生存する環境の特徴も反映するだろう。そのような要素に動機づけられているという点で、言語は有契的存在である。

本稿の1-2で意味の定義をイメージ説、概念説、指示物説、反応説、場面説から検討した。本稿の結論は、意味は人間の身体的経験に基づく心的活動の産物であると考えられる。本稿では特に、人間の感覚モダリティ（視覚、聴覚、体性感覚、触覚、臭覚、味覚）という非言語的経験が意味の形成にいかに関わっているかという点に注目した。

最後に、丸山圭三郎氏は筆者が在籍した文学部でフランス語や言語哲学をご教授されておられた。しかし、研究の真髄に接したのは卒業後であった。『ソシユールの思想』（1981）、『ソシユールを読む』（1983）、『文化のフェティシズム』（1984）はすぐに購読して深い感銘を受け、同時に在学中の己の無知を大いに恥じた。今はただ疎論を書くことでしか学恩に報いるべきがないという想いである。

引用文献

- 有馬道子（2001）パースの世界。岩波書店。
尼ヶ崎彬（1990）ことばと身体。勁草書房。
池上嘉彦（1975）意味論。大修館。
川村義治（2006）文の記憶再生における述語動詞の動作化の効果、日本教育工学会論文集30(1)、29-36
小林晴美・佐々木正人編（1997）子どもたちの言語獲得。大修館。
辻幸夫編（2001）ことばの認知科学辞典。大修館書店。
Nelson, Katherine (1977) Some evidence for the cognitive primacy of categorization and its functional basis. Merrill-Palmer Quarterly of Behaviour and Development, 19, 21-39.

- 正高信男（2001）子どもはことばをからだで覚える。中公新書。
丸山圭三郎（1981）ソシユールの思想。岩波書店。
丸山圭三郎（1983）ソシユールを読む。岩波書店。
山鳥 重（2002）記憶の神経心理学。医学書院。
山鳥 重（1998）ヒトはなぜことばを使えるのか。講談社現代新書。

辞書類

- ロングマン現代アメリカ英語辞典（2002）ヒアソシエーション。Oxford Concise Dictionary of English Etymology(1986) Oxford University Press.